# 環境保全を唱えることは〝当たり前〟に正しいことなのか?

: ブラジルでのフィールドワーク

小野 奈々

環境政策・計画学科

## 1. 社会学と環境問題

学生のみなさんは、社会学という学問をご存じで しょうか?環境科学部ではなじみがないかもしれま せんが、生物学や経済学、心理学といった分野があ るのと同じように、世の中には社会学という学問分 野があります。

どんな分野かというと、一般的には「社会現象の 実態や、現象の起こる原因に関するメカニズム(因 果関係)を解明するための学問」と理解されていま す。

社会学は、人間の行為、行動、それらの相互作用といったミクロレベルのものから、家族、コミュニティ、組織、さらには、国家や国を超えた経済活動などを含む社会構造やその変動など、マクロレベルに及ぶものまで、様々なものを研究の対象とする学問です。

「難しくて訳が分からないよ!環境問題とどんな関係があるの?」と言われてしまうかもしれません。だから、学生たちに説明する時には、こうつけ加えることにしています。「社会学は、当たり前を覆す、学問です。環境問題の現場にも "当たり前、があります。これを批判的に覆す学問も必要です」と。

環境問題にも \*当たり前、があるということを私たちは自覚しているようであまり自覚していません。例えば、「環境を保全しなければいけない」という \*当たり前、があります。環境科学部も、その \*当たり前、の上に成り立っています。でも、本当にそれはどんな時でも通用する \*当たり前、なのでしょうか。

環境保全を唱える立場の者として、私たちはいつ も、このような自問をすべきだと思います。社会問 題は「そこにある」ものではなく、人の意識によっ て「つくられる」ものだからです。

今回の特集は「こんなところに環境科学部!」なので、普段意識しない自分たちの立ち位置である「環境保全をしなくてはいけない」という \*当たり前、の是非について考えてみようと思います。

#### 2. ブラジルでのフィールドワーク

私は、時々、ブラジル連邦共和国に調査に出かけます。最近は十分な調査のための時間をとれていないのですが、大学院生だった1997年頃から数年間、心が惹かれて通った調査地がありました。日本人観光客は

あまり注目しませんが、ブラジルは、ポルトガル植民 地時代の文化遺産で知られた場所です。ブラジルの中 でも、遺産が数多くみられるミナスジェライス州が私の 通った調査地でした。中でも、世界遺産に登録されて いたディアマンティーナ市に惹かれ、そこからブラジル の環境問題についての調査を始めました。

"ディアマンティーナ"という言葉は、ポルトガル語で「ダイヤモンドのような」という意味です。「ダイヤモンドのような」という名は、植民地時代にダイヤモンドが発見されたことに由来しています。ダイヤモンドだけでなく、金も発見されました。金とダイヤモンドが採れたディアマンティーナ市は、その採掘事業をつうじて発展して、今も植民地時代のバロック建築などが遺されています。

このような場所で、私が調査をしようと思ったのは、現在も鉱物資源開発が続けられている場所の環境問題についてでした。日本と違って、豊かな天然資源に恵まれたブラジルが、その資源開発に起因する環境問題にどう対処しようとしているのかを知りたいと感じていました。そこで、現地の環境保全NGOにコンタクトを取り、フィールドワークを始めることにしました。

フィールドワークを始めて間もない頃は、地元の環境 NGO と連絡を取り合い、鉱物資源開発によって自然環境にダメージが与えられている現場を知ることだけで満足していました。しかし、現場をいくつも回るうちに、あることに気づくようになりました。それは、地元の環境 NGO が紹介してくれるいわゆる「問題が引き起こされている現場」の住民の肌の色が黒く、道路が舗装されていない山奥の質素な家屋に居住しているということでした。

調査に協力してくれる環境 NGO のメンバーと話をしたり、地元の歴史を調べるうちに分かってきたのは、現在、鉱物資源を採掘して環境問題を引き起こしている人たちの一部は、ポルトガル植民地時代に、金やダイヤモンドの採掘事業のためにアフリカ大陸から奴隷労働者としてブラジルに連行されてきた人たちの子孫だということでした。植民地時代に過酷な労働を課されながらも、一部の奴隷労働者は逃亡に成功して、逃げ込んだ山奥でコミュニティを作りました。そのコミュニティは「キロンボ」と呼ばれています。社会的・地理的な条件に恵まれなかったキロンボでは、その多くが小規模農業と小規模の鉱物資源開発によって生計を立てることになりました。その鉱物資源開発が、水源地

を埋没させたり、水質を悪化させるような環境問題を 発生させていました。つまり、環境問題は、キロンボ のあるエリアに多くみられました。

さらに調べていくと、キロンボの住民が環境問題を 引き起こすパターンも、みえてきました。

その1つは、キロンボの住民たちが自分たちで開発 事業を展開する場合です。キロンボの点在するエリア は、山地が多く、農業にも工業にも向かない地理的条 件下にあるため、住民は、自分たちの所有地の地下資 源を開発することで生計を立ててきました。けれども、 ブラジルで鉱物資源の採掘をするには、鉱業権の取得 と環境アセスメントの認可が必要です。これらの手続 きにかかる費用は高額で、経済的に豊かではないキロ ンボの住民には支払えない状況がありました。結果的 に、キロンボ住民による鉱物資源採掘事業は、正規の 法手続きを経ない違法採掘となるものが多く、そこで は法規制が無視されるために環境問題が頻発していま した。

まとめると、私が調査地とした場所で、鉱物資源開発事業による環境問題が発生していた背景には、歴史的・文化的な社会構造が強く影響していたと言えます。

## 3. 優先すべきは目前の環境問題の解決なのか?

ここで、みなさんなら、どのようにこの問題について考えるでしょうか。おそらく、10人中5人くらいは「キロンボの住民が置かれた経済的に貧しい状況を改善する」という意見を出すのではないでしょうか。

ところが、行政機関による対応は違いました。そこで取られたのは、「違法操業の取り締まりを強化する」という対応です。

私の調査地のキロンボでは、環境警察の取り締まりにより事業が操業停止となり、住民全体が失業に陥りました。失業した住民に対して行政機関が何を言ってきたかというと、「事業を再開させるために、きちんと法規制にのっとった手続きを踏んで鉱業権と環境アセスメントの認可を取得すること、それから、違法操業をしていた代償として罰金を支払うように」というものでした。

また、その件に関わっていた環境 NGO の態度も、 行政機関とよく似たものでした。操業停止になった キロンボに彼らが伝えたのは、「操業を合法化する ための協力をする。法規制にのっとり、環境保全に 配慮することを誓うなら、罰金の支払い期限を延長 する交渉を引き受けよう」といったものでした。

調査をつうじて、行政機関とも、環境 NGO とも 直接意見を交換する機会がありましたが、どちらの 意見も、突き詰めれば、「環境に配慮しない違法な 操業しかできないのならば、操業は停止させる。それで失業するのがいやならば、キロンボの住民は、 鉱業開発で生計を立てるのを諦めて、どこかへ出稼 ぎに出るべきだ」という意見でした。

けれども、私が調査した限りでは、キロンボの住 民は、自分たちのコミュニティの外に出稼ぎに出る ことをとても嫌がっていました。都市に出て労働者 になるには、学歴などの面で不利であり、また、ど ちらかというとかなり閉鎖的なコミュニティで一般 社会と異なる文化を身につけてきた彼らは、出稼ぎ に出ても精神的に満たされないことを経験的に知っ ていたからです。彼らにとって、コミュニティの内 と外はまったくの別世界でした。コミュニティの内 では、住民同士で経済力を競い合うことがあっても、 お互いそれほどの差がありませんでした。また、負 の歴史を共に背負って、山奥で固まって生活してき たので、キロンボは、血縁的にみてもひとつの大家 族のコミュニティになっていて、コミュニティの中 には独特の信頼関係がありました。キロンボの住民 にとって、そのコミュニティをみんなで捨てて散り 散りに外に出稼ぎに出ていくという選択は、社会的 に不利になることと、自分たちが最後に逃げ込める 唯一のシェルター (避難所) であるコミュニティを 崩壊の危機にさらすことを意味していたのです。

すでに紹介したように、行政機関と環境 NGO の 意見は、「環境に配慮しない違法な操業しかできな いのならば、操業は停止だ。それで失業するのがい やならば、キロンボの住民は、鉱業開発で生計を立 てるのを諦めて、どこかへ出稼ぎに出るべきだ」と いうものでした。これに対して、一般の市街地住民 からみた見方はまた違うものでした。環境問題の取 り締まりや環境保全を第一義に考えない一般住民 は、「彼ら(キロンボの住民)には鉱物資源の開発 くらいしか生計を立てる手段がない。法にのっとっ た正規の手続きをする資金もないのだから、それを あまり厳しく取り締まるべきではない」というもの でした。それだけではなく、こんな声も聞かれまし た。それは、「環境保全を唱えている人たちは、自 分たちはきれいな家に住んで、立派な家財道具を 持って、職があって、大きな車に乗っている。だか ら環境が大事というけれど、環境保全では食べてい けない人たちもいる」という声でした。環境保全を 唱える人たちと環境問題を引き起こす人たちとの間 に横たわる経済的な格差について一般住民は、敏感 に反応していました。

ここでみなさんは、次のように疑問に思うのでは ないでしょうか。「どうして、環境保全を唱える人 たちは、キロンボの住民が置かれた社会的経済的な 困窮状態の改善の必要性ではなく、法にのっとって 環境が守られないことばかりを訴えるのだろうか」 と。こんな疑問が出てきてもおかしくないと思いま す。

なぜこのような違いが出てくるのでしょうか。

### 4. 環境保全を唱えることの正しさについて

私たちが暮らす社会では、地球温暖化や森林破壊、酸性雨、石油資源や淡水資源の枯渇などの環境問題が、ある時期から大きく取り上げられるようになり、それが地球上の生物の存亡にかかわる壮大なスケールで語られるようになりました。地球上の生物全体の存亡にかかわる問題ですから、「環境保全って大事!」という考え方が、子どもの頃から強く植え付けられるようになりました。みなさんも、そのような問題意識をもって環境科学部で学びたいという気持ちを強く持っていると思います。

けれども、何かの問題がそのように壮大なスケールで語られる時にこそ、本当は一度立ち止まって、疑うことを忘れないようにしなければいけないと思います。なぜかというと、「万人が認める正しさ」になったものは、その趨勢に沿う事ができない少数派の人たちにとって、脅威になるからです。そして今、万人が認める「絶対的な正しさ」とともに語られているのが、環境保全や環境問題の解決なのです。

そのように、絶対的に、正しいと考えられるようになった事柄は、その時代の体制や権力と密な関わりをもつことになります。誰もが認めてくれる、絶対的に、正しいことに寄り添って生計を立てていこうとする人たちが、自分たちの立場の確立や維持とあわせて、強い発言権や主導権を握るようになります。これは環境問題をめぐる社会状況においても同じことです。

例えば、環境問題を引き起こすようなリスクの管理が、社会構造を設計し規定していく原動力として位置づけられるようになります。現実に、法規制や環境アセスメント制度の制定、その運営に携わる専門家などが、社会的に強い影響力を持つようになります。また、そこには、ビジネスチャンスが生まれ、経済活動に関心がある人々も集まってきます。そして、環境に関わるリスク管理などで重要な判断を仕切る立場に位置づけられる専門家や組織が、社会構造の上位に立つような社会になります。

環境科学部に入学した学生やそこで働く研究者は、 そのような影響力をもつことができる将来に憧れてき た人たちでもあると思います。「社会をよくするために 環境保全を学んで、役に立つ人になりたい!専門性を 身に付けたい!」という純粋な気持ちがあることにつ いては否定しませんが、社会をよくしようと思えば社会 的にそれなりのポジションにつくことを目指しますし、 実際、そのような将来を目指す学生が多いでしょう。

けれども、だからこそ、ひとつ深呼吸をして、大事な判断をする場面で、次のような自問をする習慣を身につけて欲しいと思います。それは、「<今、ここ>で、最も大切にするべきことは、果たして、目前の環境問題の解決なのだろうか?」ということです。

環境問題の解決を訴えたり、そのための方途や技 術を明らかにしていくことは、現在、誰もがとても大切 なことだと認めています。つまり、それは今誰に対して も説明を必要としない、当たり前、の「正しさ」になっ ています。ブラジルをとりまく状況も同様でした。1992 年に、リオデジャネイロで「環境と開発に関する国際 連合会議(地球環境サミット)」が開催されてから、「環 境保全主義者 (Ambientalista)」と呼ばれる人たちが 国内にたくさん登場しました。彼らの多くは、中間エリー ト層で、多数の国が強く訴え始めた環境保全の重要性 に強く共鳴した人たちでした。そして、ブラジル国内 の各地で、環境保全活動が展開されるようになりまし た。ブラジルの政府機関も、自国の豊かな自然資源と 天然資源の保全のための体制づくりに力を入れるよう になっていきました。そして、2000年代にかけて「環 境保全は大切だ」という機運が盛り上げられていった

私の事例地の環境 NGO や行政機関の職員も、そのような時代を経て善意で環境保全に取り組んできた人たちでした。彼らも、キロンボが環境問題を引き起こす理由となる社会的・経済的背景を察していました。けれども、「環境保全を早く実現して、ブラジルをよい社会にしなければ」という思いがとても強く、キロンボが直面している社会構造や経済面の課題から目をそらして、目前の環境問題の解決を優先させる判断をしたのです。

しかしながら、環境問題というのは、多くの場合、 社会構造的な問題が関わって生じています。経済格差 が大きい南米では、先住民やキロンボなどの歴史的に 不利な立場に置かれてきた人たちが環境問題の発生に 関わることが多いです。目前の環境問題の解決や保全 の重要性を安易に訴えることは、そのような人たちを 社会的により不利な状況に追い込む結果につながるこ ともあります。

南米ほど経済格差が大きくない日本でも、環境問題が発生する根源を追えば、根深い社会構造的な問題が背景にあるケースが存在するかもしれません。「ルールを厳しくすればいい」、「制度を整えればいい」、「科学技術を発達させればいい」といった技術論的な解決に思いを巡らす前に、環境問題が発生する背景に社会構造的な課題がしばしば関わっていることを理解し

て、そこにも目を配って、「<今、ここ>で大切にするべきことは、果たして、目前の環境問題を解決することなのか?」と自問自答することを、ぜひ習慣として身につけて欲しいと思います。そのようなところにも「環境科学部」を見つけてくれたらよいな、と願っています。